

『私たちは上って行く』(ルカの福音書 18 章 31-34 節) 2022.4.3.

<はじめに> 「5分でわかる〇〇」「△△早わかり」などで、手っ取り早く知識・情報を手に入れることができる便利な時代です。それに比べて、聖書は(牧師の説教は)分かりにくい、とよく言われます。そのことばの背後ある「分かる」には、どんなことを期待しているのでしょうか。

I エルサレムに上る(31)

① イエス一行の旅

イエスは主にガリラヤ湖周辺で活動しながら、エルサレムにも何度か出向いておられます。最後のエルサレムへの旅の出来事を、ルカは他の福音書よりも多く描いています(9:51-)。過越の祭りに向かう群衆に混じって、イエスと12弟子はエルサレムに向かっています。

② 上って行く

エルサレムは山の上にある街ですから、向かう道は上り坂です。しかもエルサレムは都ですから、「都上り」となります。そこには神殿があり、神への礼拝と祭礼へと人々は向かいます。いと高き神に近づき、お会いすることを「(山に)上る」と聖徒たちは称しました。

③ 上る自分への問い掛け

大切な人と会い、大事な用事で出向くとき、私たちはどのような心備えで臨むでしょうか。あなたが神とお会いするのは、どんな場面ですか。自分から神に向き合おうとするとき、どんなことに注意を払い、何を心掛けているのでしょうか。

II 人の子について

① エルサレムで起こること(32-33)

この予告は3度目です(=マタイ 20:17-19、①16:21、②17:22-23)。「人の子」はイエス自身がメシア(救い主)としての役割と働きを示すときに常用された呼称です。7つの動詞は、これからエルサレムで自身の身に及ぶ出来事を指しています。

② 預言の実現(31)

32-33節で示されたことは、偶発的ではなく、古の預言者たちが書き記していた神の計画の実現であると、イエスは告げます。詩篇 22 篇、イザヤ 53 章、詩篇 16 篇などは、この一連の出来事の預言です。まさしく神が約束されたメシア(救い主)のメインテーマです。

③ 人の子が辿る道

神に遣わされ、みこころを生きるイエスさえ波乱の道筋を通られました。イエスに従う者も同じです(I ペテロ 2:21-25)。道筋はどうであれ、「しかし…よみがえります」で締め括られていることは希望です。

III 隠されたことば

① 分からない弟子たち(34)

この予告を聞けば聞くほど、弟子たちは困惑・混乱します。一行を取り囲む祭りに巡礼者たちの間でも、イエスへの期待は膨らむばかりでした。イエスが語る出来事の兆候など見当たりません。このイエスのことばに覆いがかけられて、隠されていたからです。

② 神は予め語られる

現象や状況観察から、ある程度先を予測できることもあります。万全ではありません。しかし、世界と歴史の主である神は、大切なことを予め語られます。聞いた者がその時すべてを理解し、受け入れることが出来なくても、後にそれを確認し、神を信じるためです。

③ 後で分かるようになる(ヨハネ 13:7)

今、分からないことを神は責められません。ご承知済みです。分からなくても、聞いて、心に留めておくと、やがて分かるようになります。この箇所が書き記されたのもその証しです。私たちが神の御前に立つとき、すべての覆いが取り除けられて、分かるようになります。

<おわりに> 神は人にどうしても伝えたいことがあります。「神は人を罪から救おうと、救い主を与えておられる」御計画です。それをいろいろな形や表現を通して、繰り返し提示されています。それに触れ続け、神と向き合えば向き合うほどに、分かってきます。(H.M.)